

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

#1 高1
国語

二〇一四年度
第一回 全統高一模試問題

国語 (八〇分)

二〇一四年五月実施

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は、21ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。「受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の国語の解答用紙を切り離し、所定欄に
氏名（漢字及びフリガナ）、**在学高校名**、**クラス名**、**出席番号**、**受験番号**（受験票発行の場合のみ）を明確に記入すること。
- 五、試験終了の合図で右記四、の の箇所を再度確認すること。
- 六、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

【一】 次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 八十点）

人はなぜ占いを信じるのか、あるいは、信じないまでも気になるのかを考えてみたい。¹

占いは、偶然の出来事を別の何かに関係づけることによって、偶然ではないように装う。露木まさひろは、人間は「いっけん関係なさそうなことでも、その関係を立証しようとして無駄なエネルギーを消費して、意味づけをする」「占いやジンクスの発生は、人類が『関係思考』を神経質なまでに、高めてしまったからにほかならない」「関係づける、という行為が人間の知的生産のプロセスであり、思考方法の基礎的反応」だと言っている。占いは、事物を関係のなかで見ようとするのである。

関係づけの方法は、複数の事物、とくに二つの事物を対立関係に置くことである。それを説明するためには、まず、言葉の問²題に戻る必要がある。

人間（文化）は、世界を区切り、区切られて囲まれた部分に名前をつける。

区切って囲むには、囲いのなかに入るものと入らないものを区別するために、何かの違いを取り上げなければならない。たとえば動物と植物は、普通の人のとらえ方では、自ら移動できるかできないかによって分けられる。少し知識がある人なら、光合成ができるか否かによって分けるだろう。もちろん、これらは厳密さを欠いた区分けである。しかし、ここでは科学用語、生物学用語ではなく、Aな言葉を問題にするので、普通の人のとらえ方で考えていく。

世界を区切るとは、右のように、まず違いを見いだすことである。言い換えれば、差異がなければ、対象をとらえることはできない。その差異を、人間は単なる違いというより、反意関係、さらには対立関係ととらえようとする。

その反意関係、対立関係とは、あくまでも文化によってとらえられるものである。西洋占星術では太陽と月を男と女の対立と結び付けているが、メキシコのマヤ語系のチャムラの人びとも、太陽はキリスト（男）、月はマリア（女）と考えている。しかし日本の神話では、太陽を象徴するアマテラスは女で、月を象徴とするツクヨミは男である。太陽と月の対立を男女の対立のどちらと結び付けるかは、あくまでも文化の問題である。

このように、反意関係はさまざまな性格をもっているが、ある言葉とある言葉は、少なくとも何らかの点で反意関係にあるとみなすことができる。まったく違いがないのであれば、二つの言葉が同時に存在する必要はない。たとえば、日本語には「はしる」と「かける」がある。似ている言葉だが、われわれはこの二つを使い分けている。「かけっこ」と言うが「はしりっこ」とは言えない。「はしり幅跳び」と言えるが「かけ幅跳び」とは言えない。日本語を母語とする人は、自覚してはいないが、「はしる」と「かける」の違いを知っている。

つまり、一つの言葉はほかの言葉と何らかの反意関係で結ばれている。一つの言葉は、そういう反意関係の束と言える。たとえば、日本語の「あに」という言葉は、「あね」という言葉とは〈男〉と〈女〉、「おとうと」とは〈年長〉と〈年少〉という反意関係で結ばれている。

標準的な辞書にキサイ^aされている語の意味は、私たちが世界を見るときにその世界を「切り取る」、分類法の標準的イチラン^b表となっている。その取組み表のなかでは、なぜかある型の対義関係が、たとえば「生」対「死」が、「東洋」対「西洋」が、「文科」対「理科」が、常識の認識体制として当然の了解事項となっている。「生」の反対は？ と問われれば人は「死」と答える。「東洋」の対立項は当然のことにように「西洋」である。そのせいで、それらの標準化した対^c以外^dの方向へ放射する別の対義関係がありうることを、私たちはつい忘れてしまう。標準語の意味体制が、いわば、名門の対義関係のみを、あたかもスペクタクルではない現実そのものの公平無私な姿でもあるかのように（じつはそれもまたひとつのスペクタクルであったことなど、とんと感じられなくなるほど自然に）私たちの認識体制のなかにしみこませる。意味のダセイ^e状態が、いつまでも「ジャイアンツ」の対義項は「タイガース」であり、それ以外にはありえないという錯覚を生む。（佐藤信夫『レトリック認識』）

言葉はこのように、ほかの言葉と反意関係という対立関係、つまり二項対立関係に置かれることによってそれぞれが規定され、

意味が生じると言えるだろう。

ほかの何かと対立関係に置くことによって、自己規定がなされる。これはさまざまな文化現象、社会現象にも見られることだ。生は死を知ることによって意味づけられる。健康は病気になるって初めてありがたさがわかる。J・L・オースティンは、*read* という言葉の分析によって、否定主導語という考えを^dテイジしている。「本当の」という言葉はそれ自身では意味不明である。それは、「本当でない」ということによって、初めてその意味が明らかになるのである。野矢茂樹は、これを正常と異常の関係に適用している。正常とは、異常の否定、^eケツジョによって示されるものである。

この数十年、エドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』という本がさまざまな分野に大きな影響を与えた。この本でサイードが主張したのは、西欧がオリエント、すなわちイスラム世界やアジア、つまりは非西欧文化・社会を遅れたもの、劣ったものの、Cなものなどと規定することによって、自らの西欧文化・社会を進んだもの、優れたもの、理知的なものなどと規定し、それが西欧による非西欧社会の支配の原理、根拠ともなったということである。同じことは西欧内部で女性に対してもおこなわれ、男による女性の^fヨクアツ、支配を正当化したのだという。

このとらえ方には批判も多いが、⁴他者がある姿に描くことによって、その逆として自らを描くという状況はしばしば見られる。戦後、ルース・ベネディクトの『菊と刀』という日本人論、日本文化論、日本社会論がよく読まれたが、これも米山リサによれば、「日本とはすなわち、アメリカ的でないすべて、非アメリカ文化そのものとして描かれる。日本文化の特徴的性格は、アメリカ文化の理想を構成する自由意思と自発性の尊重、普遍主義的倫理観、民主主義的自由を愛する態度、個人の自律性と平等を重視する価値観、といったものの^{たいせき}対蹠的存在とされる」のであり、日本を描くことによって、その鏡として、虚構のアメリカを作り上げたのだという。

そのような二項対立構造は、多くの占いに使われている。

まず、予兆の例を見てみよう。予兆は、さまざまな自然現象、動物、植物、行動など、何らかのものやことを、未知のことを知らせす「しるし」ととらえる。たとえば、黒猫が前方を横切ると不幸がある、などとよく言われる。あるいは、朝、黒猫を

見ると不吉とも言われる。これらは一見、黒猫という動物だけを問題にしているように思えるが、その意味を読み取る際には、それを何かとの対立関係のなかで見ているのだ。つまり、出会った動物を白ではなく黒、犬ではなく猫とし、また後ろではなく前、あるいは夕ではなく朝、そして吉ではなく凶というとらえ方をしているのである。

血液型占いで、何型の人は積極的な性格をもつと言った場合、ほかの何型かが消極的なので、この表現は意味をもつのだ。具体的には、A型は消極的、B型は積極的など対立関係に置かれ、A B型とO型は非行動的と行動的など、別の対立関係に置かれる。またA B型はA型要素とB型要素を両方もち、O型はどちらももたないという形で、A型、B型と対立関係をもっている。一つの占い体系のなかで言われていることは、その否定、あるいは逆がどこかにならず組み込まれている。そうすることによって、どちらもたがいにたしかであるかのように思わせてしまう。たとえば、血液型A型は消極的だと言われても、それだけでは納得しにくいだろうが、A型は消極的でB型は積極的、A型はシャイで内気で、B型は明るく D などと言われると、そうかもしれないと思ってしまう。単独では説得力が弱くても、二つ以上のことを対比されると、説得力が増すように思われるのである。

占い理論の多くは二項対立によって構築されている。これが、二項対立的思考法をとる人間に占いが受け入れられやすく、また説得力をもつ大きな理由ではないだろうか。先ほど述べたように、二項対立によって対立概念を示されると、その逆のものが規定されたように人は思ってしまうのである。

これは対句表現の効果を考えても納得がいくだろう。しばしば予兆は対句表現をとっている。朝焼けはその日の雨、夕焼けはあしたの晴れとか、朝蜘蛛ぐもは吉、夜蜘蛛は凶などがその例である。対句表現は複数の二項対立を組み合わせて作られているので、単独での表現よりも真実味を帯びているように思われるのである。対句形式で表現されると、本来は類義語であるものさえ、対義語であるかのように受け取られてしまう。たとえば、「太郎は花子を愛していた、しかし彼女のほうは彼に恋をしていたのである」と言われると、愛と恋という類義語が、あたかも対義語であるかのように受け取られるのである。

（板橋作美『占いにはまる女性と若者』）

(注) ○ジャイアンツ、タイガース……ともに日本のプロ野球球団の名称。両チームをライバルと考えている野球ファンは多い。

問一 傍線部 a～f のカタカナを漢字に改めよ（楷書で正確に書くこと）。

問二 波線部『はしる』と『かける』とあるが、次の①～③の文の空欄 には、「はしる」「かける」のどちらを入れるのが適当か。「はしる」を入れるべきものをア、「かける」を入れるべきものをイとし、それぞれ記号で答えよ。

- ① 知らせを受け、急いで使いに 。
- ② 県の中心部を南北に 山脈。
- ③ その姿は天を 鳥のようだった。

問三 空欄 A D に入れるのに最も適当な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを繰り返し用いてはならない。

ア 自動的 イ 日常的 ウ 抽象的 エ 社交的 オ 本能的 カ 否定的

問四 傍線部1「人はなぜ占いを信じるのか、あるいは、信じないまでも気になるのか」とあるが、その理由を筆者はどのように説明しているか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 人間は、偶然の出来事に遭遇したときに、その出来事がなぜ生じたかを考えずにはいられない存在だが、占いも、偶然の出来事に対して、それが生じた原因を説明してくれるものだから。

イ 人間には、偶然の出来事に遭遇したときに、その出来事が偶然ではないと信じたがるようなところがあるが、占いにも、偶然の出来事を別の何かに関係づけることで、それを必然的な出来事のように思わせる働きがあるから。

ウ 人間は言語によって世界を認識するが、その言語にはあらゆる言語を通じて普遍的な二項対立的概念が存在しており、占いも、そうした二項対立的な概念を巧みに用いて、人びとに何かを信じさせようとするものだから。

エ 人間は、自分の属する文化のなかで自明となっている二項対立的な言葉の關係に則^{したが}って世界を認識しようとする性向をもつため、二項対立的な概念をもっともらしく用いた占いの言葉に、説得力を感じてしまうから。

オ 人間は、二項対立的な概念によって世界を把握し、そのことによって文化や科学を発展させてきたが、占いも、二項対立的な言葉と概念を巧みに導入することで、発展し、進歩を遂げてきたから。

問五 傍線部2「言葉の問題」とあるが、本文に述べられている「言葉」についての説明として正しくないものを、次の中から

一つ選び、記号で答えよ。

ア 人間は、ある事物がどういうものかということを、言葉によって認識する。

イ ある言葉がどういう意味を担っているかは、文化によって異なっている。

ウ 一つの言語体系のなかに、意味のまったく違わない二つの別の言葉は、必要とされない。

エ 一般的な言葉は、私たちの常識的な認識のあり方と強く結び付いている。

オ 一つの言葉は、必ずある特定の一つの言葉と反意関係で結ばれている。

問六 傍線部3「いわば、名門の対義関係のみを……私たちの認識体制のなかにしみこませる」とあるが、こうした言い方を通して述べられているのは、どういうことだと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 私たちは対義関係によって世界を把握しており、どんな言葉とどんな言葉とを対義関係と見なすかは個人によって異なっているが、そうしたことはしばしば見逃されてしまい、一般には対義関係は普遍的なものと思われてしまいがちだということ。

イ ある言葉とある言葉とが対義関係になる理由を客観的に説明することは難しいが、常識的な了解事項となっている対義関係については、私たちはそうしたことを意識せず、それらの対義関係を何の疑問も抱くことなく受け入れてしまっているということ。

ウ 対義関係には、ごく当たり前と感じられるものと、あまり一般的ではないと感じられるものがあるが、後者は人間の世界認識を阻害するものであるため、私たちには、常識的で当然の了解事項となっている対義関係を身につけることが求められているということ。

エ 私たちは対義関係を通して世界を認識していると考えているものの、それは思いこみにすぎず、実際には対義関係というものは人間の世界認識にさほど役立っていないが、私たちは日常の生活のなかで、そうしたことに気づかなくなっているということ。

オ 言葉には別の言葉と対義関係で結ばれているものと、そうした関係をもたないものがあるが、標準的な意味体制のなかでは前者だけが当然の了解事項となっており、あまりにも強い力をもっているため、私たちは後者の存在を忘れてしまいがちだということ。

問七 傍線部4「他者をある姿に描くことによって、その逆として自らを描く」とあるが、「ルース・ベネディクトの『菊と刀』」の場合、「自ら」に相当するものは何か。それを言い表している五字以上八字以内の語句を、本文中から抜き出して記せ。

問八 傍線部5「二項対立的思考法をとる人間」とあるが、「人間」が「二項対立的思考法をとる」ようになるのはどうしてか。本文に即して七十字以内（句読点や記号も字数を含む）で説明せよ。

問九 筆者の意見に合致するものを、次の中から二つ選び、記号で答えよ。なお、解答の順序は問わない。

ア 言葉の意味は、その言葉それ自体だけでは確定できず、それと対立する概念をもち出すことによって意味が明らかになることがある。

イ 二項対立的な思考法を用いて自己を正当化し、相手を不当におとしめるというやり方は、西欧と非西欧との間に見られる特有なものである。

ウ 二項対立的な思考法においては、片方の概念の正当性を強調すればするほど、それと対立する概念のうさんくささが見えてくるということがある。

エ 学問の世界では難解で専門的な対立概念が用いられることがあるが、それらのほとんどは、私たちが一般に用いている対立概念を下敷きにしたものである。

オ 二項対立的な表現に説得力をもたせるには、いたずらに数多くの対立概念を用いるのではなく、一対の対立概念に的をしばった明快な言い回しをすることが望ましい。

カ 人間は二項対立的な思考法によって事物を認識しようとするが、そうした思考法は、望ましい自己像を描く際に利用されることがある。

国語の問題は次の頁へ続く。

〔二〕次の文章は、一九七六年に発表されたものである。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

稚内^{わっかない}と礼文島^{れぶん}の間に、それほど大きくない定期連絡船が走っている。二等船室を十文字に通路で区切って、四つのマスにそれぞれ二十人ほどの船客がすわれるようになって¹いる。これからお話しする出来事は、礼文島発便の右の船室のなかで起こった。私が船内にはいったときはもうかなりの混雑だったが、それでもマスのなかには、人間二人ほどの空間が残っていた。そこをめぐって靴を脱ぎはじめると、横合いからふいに声がとんだ。

「そこ、ダンタイなんです」

若い娘さんである。一瞬、意味がよくのみこめないままに相手の顔を見返していると、もう一度いった。

「ダンタイですから」

ああ、団体か。なるほど見れば、柱のかげには団体名を記した青旗が立っている。マスの真中では酒壇^{びん}片手に花札^{（注）}のご開帳で、日本全国どこへ行ってもおなじみの、お犬様ならぬ団体様の太平楽^{まっさか}の真盛りである。

そういえば、乗船前に係員が「団体サンはこちらへ」と別の乗船口に案内していた。別のマスを見ると、案の定、どれもこれも青旗がへんぽんとひるがえっている。私は完全にあらゆるマスから閉め出されたことを知った。

個人は、どうなったのだろう。団体割引の恩恵にも **A** さず、正規の料金を支払ってのこのこ乗りこんできた個人は、家畜のようにマスからはみ出して汚れた通路にうつそりと陰気にうずくまった。個人以外の何者でもない私は、その仲間入りをさせてもらうほかはない。

ところが、それからが一大事だったのである。団体という名の怪物は、今度は無数の手足を伸ばして通路まで我が物顔に支配しはじめた。船酔いの吐き気を催してひっきりなしに便所に立つ。ジュースを買いに売店に走る。記念撮影とやらで甲板^{かんぱん}に出る、はいる。

巨大な百足^{むかで}の足がぞろぞろうごめいているようなものだから、相手は背なから、横合いから、正面から、どこから襲撃して

くるかわからない。その度^aに人間以下であるところの個人は、身体をねじ曲げ、立ち上がり、足を引っこめ、リュックを頭上に持ち上げ、それからまた、ぎりぎりに一人分こじ開けた蛸壺^{たこつば}さながらの居場所に、もぞもぞと身体を嵌め^はこむ。その、実に忍耐強いくり返しであった。

そのうちに、私の頭のなかで閃^{ひらめ}いたものがあった。これは、単に礼文島―稚内間の三時間の船室風景ではない。あのマスのなかこそは、各種団体の上位組織であるところの管理社会、通路は、そこからも落ちこぼれた無能な個人の寄る辺^べのないハキダメであって、船内の三時間とはつまり、はみ出し野郎どものこれから先の永の一生なのだ。そう思うと、団体の占拠したマスが、どれもコンクリート製の真白な高層建築物に見え、対するにわれらが通路は、寒風吹きすさぶ無情な路傍であるかのごとくに実感され、それならば先程私を呼びとがめた若い娘さんは大ビジネス・ビルの受付でいかがわしい部外者をチェックする一流会社の人OLということになる。現実にもそうなのだろう。大げさない方をすれば、私は前途に絶望した。

ブーアスティンというアメリカの社会学者が十五年ほど前に、テクノロジーの発達が人間のあらゆる行動を疑似体験に変えてしまう高度管理社会の宿命を、アメリカ社会を対象にして分析している（『幻影の時代』）。この本の冒頭には、たしかスイスの小説家マックス・フリッシュの「テクノロジー、それはわれわれが世の中のことを経験しなくてもすむように世界を変えてしまう方法のことである。」という言葉が掲げられていた。

ことほどさようにテクノロジーは、直接性の体験を消してしまう。ニュースは製造された疑似イベントであり、英雄は人間的疑似イベントとしての有名人であり、^(注)ツーリズムは「日常的幻影の量的拡張であるような幻想の牢獄」である、とブーアスティンはいう。

アフリカの原野で猛獣狩り見物にしてもバスのなかは適温に冷房され、展望ガラスは野獣の爪から内部の人間を完璧に遮断している。結構な話ではあるけれども、それならば、この、吸血蚊もマラリアも、汗も日射病もない完璧なアフリカ旅行は、テレビの画面で見る他人のアフリカ旅行とどこが違うのだろうか。

私が十五年前にブーアスティンの論文を読んだ頃は、右のようなテクノロジー社会のうそ寒い光景はまだ対岸の X で

あった。

しかしそれから十五年、高度成長期を経て、日本列島はまたたくまに「幻影の時代」のなかに組みこまれてしまったらしい。ここ数年来、たまさかの旅先の旅館で、ブラスティンの予告したような場面に出くわすことが珍しくなくなっている。

ロビーのソファに丹前を着た若者たちがすわって、コカコーラを飲みながらテレビの歌謡番組に[B]じている。彼らは一体何をしに旅に出たのだろう。どこへ行くにも彼らは蝸牛かたつむりのようにマイホームをそのままかついで行つて、その窓際から、通りすぎる風景を眺めたただけだったのだ。

団体旅行は、右の場合のマイホームが職場に変わった旅行形式である。旅に出てまで「課長、まず一献いっせん」などとやる。本来なら、旅こそは、日常生活の拘束から離れて心おきなく変身へんしんすることが可能な場なのである。旅に出たタイプピストはタイプを打たない。旅先の課長は伝票に判を押さないし、夜は行きつけのバアでいつものボトルを空けはしない。どんな土地が、どんな人びとが、どんな居酒屋が行く手に待っていて、そこでどんな見たこともない肴さかなでどんな地酒が出るか分からないという期待と不安のゆらめきに身を[C]せているのが、旅の本来の醍醐味たきごみである。

旅では、自分が自分にぴったり重なっている日常生活とは違って、社会や家族関係の側から決定された役割を脱ぎ捨てることができる。せっかくのそのチャンスにまで、課長面づらをしてふんぞりかえっているのは愚の骨頂2ではないか。

「何が起るか、きまっている」のが日常生活なら、「次の瞬間に、何が起るか分からない」のが旅だ。船や乗物のように、たえず動揺して安定しないのが旅の気分である。

それは何が起るか分からないという不安ではあるが、同時に日常には経験できない何かが起るという期待でもあって、そういうことが実際に起れば、驚異というかけがえのない感情を味わうことができる。

それにしてもツーリズムがほぼ全面的に管理化されてしまった現代の趨勢さうしのなかで、個人があくまでも旅の本物の体験を手離さないためには対抗策を要する。

まず、画一d集団のためにセットされたコースの裏をかく。たとえば、職業上の取材旅行は別として、旅先にどんな有名な名勝

旧蹟があっても見向きもしないで、どこにでもありそうな場末の町をうろつく。名物と名のつく、やたらにひとの足もとにつけこんだような食物はなるべく敬遠して、ラーメンや安定食^{やす}を食う。

金沢に行ってゴリや蟹^{かに}を食べてこなかったといって、友人に馬鹿にされたことがあるけれども、私にいわせれば、名物というもの^(注)がその土地の性格を味覚的に特徴づけるものとすれば、新宿のラーメンと香林坊^(注)のラーメンとの、微妙な、しかし厳然たる違いのほうが、金沢の風土性をより尖鋭^{せんえい}に物語っている場合があることを、彼は知らないだけのことである。

³変装をするのもいい。ゲートは旅のさなかで変装をする名人だった。『イタリヤ紀行』には、いたるところで身分を詐称^{さしょう}したり、旧知の人に別人と思わせたり、名前を変えたりして、旅先の人びとをたぶらかしては[D]にいつているゲートの姿が描かれている。金銭の利得がともなえば立派に詐欺罪を構成しそうなきわどい場面もないではない。

ゲートは別に悪事を働こうとしているのではなくて、変装や身分詐称はある意味で旅人であることの論理的徹底の結果なのである。旅が、日常の自己同一性（たとえば××会社課長代理、妻と二人の子持ちというような）からの解放、もしくは離脱として、ふだんの自分からできるだけかけ離れた人間に変身する快楽を可能にするものであるとするならば、最大の変身は、自分ではないもの、すなわち赤の他人になり切ってしまうことだからだ。

パリで行き当たりばったりに、地下鉄を乗ったり降りたりしているうちに、夕暮れ時に北停車場^{ギヤル・ド・ノール}の広場にきていた。このあたりは白人の姿が見当たらず、アラブやチュニジアの黒人が闇の中に身体ごと溶けて、眼ばかりが白い。ぶらぶらしていると、通りすがりのアラブ人に「台湾人か？」と声をかけられた。あいまいにうなずくと、路地をいくつも曲がって、真暗な街並みのなかにそこだけギラギラと明るい台湾料理屋に案内された。

そこで食べたラーメンは、優に二人前はあって減法美味^{うま}く、値段は邦貨にして三百円以下だったのを記憶している。相手の錯覚を訂正しなかっただけで、別段意識的に国籍を詐称したわけではないが、おかげでささやかな冒険にめぐりあえたわけだ。

（種村季弘「あまのじやく旅行術」）

(注) ○花札……カルタの一種。札には花が描かれており、さまざまな遊び方がある。

○ツリーズム……観光旅行。観光事業。

○ゴリ……一般にはカジカと呼ばれる淡水魚。金沢の名物とされる。

○香林坊……金沢の繁華街。

問一 波線部 a ～ d の漢字の読みを、ひらがなで答えよ。

問二 空欄 **A** ～ **D** に入れるのに最も適当な漢字を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを繰り返し用いてはならない。

ア 冠 イ 任 ウ 悦 エ 浴 オ 興 カ 楽

問三 空欄 **X** に入れるのに最も適当な漢字二字の言葉を書えよ。

問四 次の一文は、もともと本文中のある段落の末尾にあったものである。元に戻すとしたら、どこに入れるのが最も適当か。
挿入箇所の直前の五字（句読点や記号も字数に含む）を書えよ。

この社会には、もう個人の生きる余地は残されていないのではなからうか。

問五 傍線部 1 「これからお話しする出来事」は、本文ではどのように描写されているか。その説明として正しくないものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 団体客の集団全体が一つの生き物であるかのように描かれており、そのことによって、船中で我が物顔にふるまってい

る彼らのようすが強調されている。

イ「そこ、ダンタイなんです」という言葉のなかの「ダンタイ」がカタカナで表記されているのは、筆者が当初、この語の意味をよく理解できなかったということを示すためだと考えられる。

ウ 酒を飲みながら花札を楽しんでいる団体客のようすを描いた部分の表現からは、筆者の団体客に対する皮肉を読み取ることができる。

エ「ぞろぞろ」「もぞもぞ」などの擬態語が効果的に用いられており、そのことによって、描写にユーモラスな雰囲気が付加わっている。

オ 団体客が不気味な怪物に、そうでない客が弱い個人にたとえられており、そうした両者が互いに譲らずやりあうさまが、巧みな言葉づかいによって表現されている。

問六 傍線部2「愚の骨頂ではないか」とあるが、このように言うのはどうしてか。本文に即して六十字以内（句読点や記号も

字数を含む）で説明せよ。

問七 傍線部3「変装をするのもいい」とあるが、このように言うのはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 身分を詐称したり別人を演じたりするといったことをしないと、旅先の土地にある本当の意味での名物に出合うことは難しいから。

イ 旅先の人びとをあざむくことは、金銭の利得の可能性さえあるきわどい行為であるという点で、他にはないような快樂をもたらしてくれるから。

ウ 行き当たりばったりにあちこちを歩き回することは、日常の生活から離れることであり、それは旅のおもしろさの神髄だといえるから。

エ 旅人になって非日常に身を置くということがどういふことを突き詰めていけば、必然的に他人になりきるといふ行為にたどり着くことになるから。

オ 知らない土地で自由にふるまうことは、管理からはみ出すことであり、現代の管理社会に組みこまれないようにする対抗策として意味のあることだから。

問八 筆者の考えに合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア テクノロジーの発達は、観光旅行を擬似体験化してしまったが、その一方で、アフリカの猛獣を間近で見られるといった直接的な体験も可能にした。

イ 現代の管理社会のなかで個人が個人として生きようとすれば、日常性から完全に脱却し、非日常の世界のなかを生き続けていくという方途を選ばざるをえない。

ウ 予想外の体験といったものは私たちに驚きをもたらすが、管理社会化の進行とテクノロジーの発達によって、そうした体験は失われつつある。

エ 日本には集団を重んじるような伝統が存在しているため、日本人の旅は昔から一貫して、管理された団体旅行といった趣を示していた。

オ 現代の日本では、組織からはみ出してしまった人間は寂しい生を送ることを強いられるが、そうしたあり方から脱却するためにも、新たな組織の形成が求められている。

きあさむ事限りなし。「石を引き退けむとすれば、百人ばかりしても敵ふべからず。させば田みな踏み損ぜられぬべし。いかにせむずる」とて、村人、大井子に降を乞ひて、「今より後は、おぼしめさむ程、水をば引せ侍るべし。この石退け給へ」と言ひければ、「さぞ覚ゆる」とて、また夜に隠れて引き退けてけり。その後は長く水論する事なくて、田焼くる事なかりけり。これぞ大井子が力頭はしそむる初めなりける。件の石、大井子が A 石とて、かの郡にいまだ侍り。

（『古今著聞集』）

（注） 1 相撲の節……旧暦七月に行う儀式。諸国から選りすぐった相撲人を宮中に召集し、天皇の御前で取組を行った。

2 越前の国……現在の福井県東部。 3 近江の国……現在の滋賀県。 4 王城……都。 5 三七日……二十一日間。

6 大井子……第一段落の「女」のこと。 7 六、七尺……およそ二メートル。 8 田焼くる事……田が干上がること。

問一 傍線部1「いといとわりなく覚えて」・4「堪へがたく覚えけり」にうかがえる、氏長の女に対する気持ちについての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 女が自分を嫌がらないのでとても愛おしく思い、間近に接して女の魅力にいつそう惹かれて感情が高ぶった。
- イ 女が自分を無視するのでとてもやりきれなく思い、間近に接して何とか女の気を引こうと心を奮い立たせた。
- ウ 女が自分に好意を示すのでとても嬉しく思ったが、間近に接すると女の魅力に気圧されてきまり悪くなった。
- エ 女が自分を避けようとするので強引に迫ろうと思ったが、間近に接すると女の迫力に負けて諦めようとした。

問二 本文中の波線部①～⑤のうち、主語の異なるものを一つ選び、番号で答えよ。

問三 傍線部2・6・8の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

2 「いごと」

ア かえって イ かなり ウ ひどく エ ますます

6 「うるはしうは」

ア たやすく イ とうとう ウ みごとに エ 仲良く

8 「あさむ」

ア 呆^{あき}れ返る イ 憤る ウ 騒ぐ エ 落胆する

問四 傍線部3「かく」の指すものとして適切な箇所を、第一段落の中から二十五字程度（句読点等を含む）で抜き出し、最初の三字を記せ。

問五 傍線部5「さほどの大事」とは何のことか。その内容が明確にわかる表現を、第一段落の中から抜き出して記せ。

問六 傍線部7「さりとて」は「いくらなんでも」の意であるが、女が氏長に伝えたかった内容を、具体的に二十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問七 氏長の、女の力に圧倒される様子を表す語を、第一段落の中から抜き出して記せ。

問八 傍線部9「いかがせむずる」は「どうしようもない」の意であるが、ここにかがえる村人の気持ちを、本文に即して具体的に六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問九 本文中の空欄Aを埋めるのに最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 相撲 イ 四方 ウ 水口 エ 横様

© Kawaijuku 2014 Printed in Japan

無断転載複写禁止・譲渡禁止